

館林キリスト教会 デポジションノート（2007年）

6月 1日 今日の通読箇所 サムエル記下 22章21～36節

サムエル記下 22章21～36節

ダビデの生涯を読んできた我々は、ここに言われているように、彼が完全な人間でないことをよく知っている。しかし次の意味でダビデは正しく、そこに神に愛された祝福される秘訣があった。第一にダビデはいつも謙遜に正直に罪を悔い改めて、信仰による罪の許しを得ていた。第二に、とにかく力の限りみ言葉の光に従うことに努めた。異邦の王たちの暴虐無道を考え、あるいはイスラエルの後の諸王と比べてみても、ダビデが正しい王であったことは、疑いの余地がない。

6月 2日 今日の通読箇所 サムエル記下 23章1～23節

サムエル記下 23章1～23節

「主の霊はわたしによって語る。その言葉はわたしの舌の上にある。」とは、説教、日曜学校、証、その他のあらゆるメッセージの奉仕において、我々が常に祈り求め、かつ期待しなければならない標準だと思う。

8節以下には、忠誠、勇敢、そして力に溢れた、ダビデの将兵たちが紹介してある。ダビデといえども、ただ一人でその大業を成し遂げたのではない。ここに記された、大勢の協力に負うことが多いのは言うまでもない。

6月 3日 今日の通読箇所 サムエル記下 24章1～14節

サムエル記下 24章1～14節

いつの頃か分からないが、ダビデの成功が絶頂だった頃、サタンの感動によって、一種の軍国主義的、国家総動員態勢を取ろうとしたことがあって、その準備として一種の国勢調査を行った。これはいつも征服に明け暮れる、世の諸王のような野心によるものと思われ、ヨアブをはじめ指導的な軍人たちも反対だったのだが、ダビデはあえてそれを強行し、今や神の怒りのご干渉を招くことになったのだ。神の祝福によって成功した場合も、勢いに乗って調子付くと危険だ。サタンはいつも狙っている。

6月 4日 今日の通読箇所 エペソ人への手紙 1：1～14

「遠大な救いの計画」

エペソはアルテミス神殿を中心に偶像礼拝とそれに関わる産業で大いに栄えた小アジアの町です。その様子は使徒行伝19章等から知ることができます。パウロはこの町に伝道し、やがて教会が誕生しました。パウロはエペソ書をロー

マの獄中から書き送りました。手紙は書き写され近隣の諸教会に回覧されたようです。3～5節には神様の遠大な救いの計画が明らかにされています。13節には聖霊の証印を押された神の民について書かれ、この証印は現在の祝福と同時に、未来の時の保証です。6節 12節 14節、この世で救いの恵みゆえに神様を褒め称え、やがての時には、救いの恵みの尊さと栄光の輝きに圧倒されて神様の御名を褒め称えるのです。

6月 5日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 1：15～23

「かしらとからだ」

パウロは教会の「主イエスに対する信仰」「すべての聖徒に対する愛」の様子を聞き感謝を捧げています。信仰と愛の実践の噂は何と嬉しい事でしょう。彼はさらに祈っています。「心の目が明らかにされて」救われた者に与えられている望み、神の国の栄光、神の絶大な力を知る事が出来るようにと。神の絶大な力はキリストに現れました。キリストは十字架の死で終わることなく甦えられたのです。そして最高の権威と権勢の方として立っておられます。驚くべきことに、教会のかしらは万物の上に立っておられるこのキリストであり、教会はキリストのからだです。教会はキリストの命に生かされ供給を受け、キリストの意思を受け、キリストのために、全器官が絶妙に各々の任務を全とうするのです。

6月 6日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 2：1～10

「憐れみに富む神」

パウロは2章で、神の救いの恵みを回顧しています。救われる前の私たちは「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」、「この世のならわしに従って生きていた者」、「肉の欲に従って日を過ごしていた者」で、当然滅ぶべき者と定められていました。しかし憐れみに富む神は、私たちをキリストと共に生かし、共によみがえらせ、共に天上で座につかせてくださった方なのです。そして私たちが救われたのは、信仰によるのであり、この驚くべき恵みを世に証するためなのです。その信仰も神の賜物であって、人の行いによるものではありません。それは誰も誇ることがないためです。このようにして、私たちは神の作品として、良い行いをするようにキリスト・イエスにあって造られ備えられたのです。

6月 7日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 2：11～22

「十字架による和解」

パウロは語ります。あなた方は、かつてはキリストを知らない異教徒であり、聖書に基づく約束の知識も権利もなかったこと、何の希望もなく神なしの生活だったことを思い起こしなさい。しかし神様は、キリストの十字架によって、神様と和解させて下さいました。また、選民イスラエルと異教徒との相互の反

目や不和も十字架によって終結したのです。今は父なる神様を信じ、共に神の民、神の家族なのです。この人々の集まりが教会です。教会という建物の土台は新約の使徒、旧約の預言者の働きです。礎石は「隅のかしら石キリスト」です。教会は、各時代、各地のクリスチャンが次々と加えられ、建て上げられ成長していきます。こうして真の和解と平和はキリストによって与えられるのです。

6月 8日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 3：1～13

「キリストの奥義」

パウロは1節で、「あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっている」と書いています。パウロが囚人となったのは、直接的には異邦人へ伝道した結果であって、カイザルの力に屈服した結果ではないのです。ですから13節で「あなたがたのためにわたしが受けている患難を見て、落胆しないでいてもらいたい。わたしの患難は、あなたがたの光栄なのである」と書いたのです。こうしてパウロは啓示によって知らされた奥義を彼らに明らかにしたのです。そのキリストの奥義とは、「異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、ユダヤ人たちと共に神の国をつぐ者となる」「両者がキリストを頭として1つからだになる」「両者が共に神の約束にあずかる」ということなのです。

6月 9日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 3：14～21

「パウロの祈り」

14節の「こういうわけで」は、1章から3章の部分の結論を受けた言葉です。ここでパウロは天地の創造者である神に2つの祈りをささげています。第一は「御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くしてくださるよう」で、第二は「キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし……また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているものすべてをもって、あなたがたを満たされるように」という祈りです。パウロはエペソのクリスチャンたちに、健康に気を配ると同様、いやそれ以上に、「内なる人」が強められるように、みことばに親しみ、祈りの時間を設け、主との交わりを期待しているのです。パウロがエペソの教会の牧師テモテにあてた手紙にはその有益性が書かれてあります。

6月10日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 4：1～16

「健康な体」

健康な体は何の不調も違和もなく、ごく自然にバランスよく機能しています。健康な体が調和しているように、聖霊は教会に一致（調和）を与えてくださいました。パウロは1節～3節で「あなたがたに勧める」すなわち「あなたがたに懇願します…聖霊が与えてくださった一致（調和）を保ち続けるように熱心

に努力しなさい。」と語ります。確かに全ては一つです。4節～6節のように、神様は唯お一人です。聖霊も、主キリストもお一人です。教会も信仰も望みも洗礼も、お一人の神様による一つのものであります。各々に与えられた賜物は様々です。しかしそれは、体の器官が仕え合っているように互いに仕え合い、教会の頭であるキリストに仕えるためなのです。

6月11日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 4：17～32

「新しき人」

ここは、クリスチャンと教会の成長に関わる勧めです。異教徒のように、あるいは神様を信じる以前のように生活してはいけません。イエス様が真理そのものですから彼に学びなさい。私たちの元の性質は、錯覚から生じる情欲によって腐敗してゆくものです。ですから元の性質を脱ぎ捨て、古い自己を捨て去りなさい。そして神様が与えてくださる新しい性質を着なさい。虚偽を捨て真実を語り、怒っても日の沈むまで続くことがあってはなりません。悪魔に余地を残してはいけませんから。勤勉に働き生計を立て貧しい人に与える者となり、悪い言葉を言わず人の徳を高め益になるように語り、聖霊を悲しませてはいけません。悪意を捨て何よりも神様が赦して下さったように互いに赦し合いなさい。

6月12日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 5：1～14

「神にならって生きる」

1節には「神にならう者になりなさい」という勧めが書かれています。子供は親のしていることを真似て育ちます。人はよかれ悪しかれ周囲の影響を受けて成長します。ここでパウロは、積極的に「神にならう者になる」ために3つのことを勧めています。第一は、キリストが私たちを愛して十字架にかかれたことを覚えて生きることです。第二に、「光の子らしく歩みなさい」という勧めも同様です。神が光の中にいますように、私たちが世に光であるキリストを仰ぎつつ歩むなら、聖霊の働きによってキリストに似た者と変えられるからです。第三に、不品行や汚れや貪欲、卑しい言葉と冗談を避けることです。誠実、純潔などが死語になりつつある現代、私たちに対する重要な勧めだと思えます。

6月13日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 5：15～21

「賢い者のよう生きる」

15節には「賢い者のように歩き」なさい、という勧めがあります。これは1節の「神にならって生きる」と同じ勧めです。パウロが「賢い者」と言っているのは、ギリシャ人の知恵と言われるようなこの世的な知恵ではなく、神の知恵、上からの知恵のことです。ですから「賢い者のように歩む」とは、キリストの福音にふさわしく生活することです。そのためには、今の時を生かして用

い、主の御旨をわきまえ、御霊に満たされて歩いていくようにすることです。パウロの時代も悪い時代でしたが、今も同様です。だから悪い時代であっても、いたずらに嘆き呟くのではなく、これをチャンスと見、生かしていくことが大事です。エペソ人への手紙は、パウロがそれを身をもって示した獄中での書簡です。

6月14日 今日の通読箇所 エペソ人への手紙 5：22～33

「夫と妻」

22節～6章9節は、いろいろな立場の人への勧めです。神様は人間関係において特定の秩序を制定されました。キリストが教会のかしらであるように、夫は妻のかしらです(23節)。まず「妻」への勧めです。教会がキリストに仕えるように「妻」はかしらである夫を「尊敬」し(33節)、「仕える」こと(22節)。尊敬とは、彼を大切にし、尊重し、服従し、窮みまで愛する意味が込められています。次に「夫」への勧めです。「夫」は妻を支配するのではなく、キリストが教会を愛してご自身をささげられたように、妻を「愛しなさい」と三度記されています(25節他)。この愛と尊敬の標準は非常に高いのです。キリストが教会を愛する「愛の模範」が掲げられているのは幸いです。神様は、夫と妻の愛と一致の関係を示して、キリストと教会の関係を分り易く、行き届いて啓示されました。

6月15日 今日の通読箇所 エペソ人への手紙 6：1～9

「両親と子供」

十戒の第五戒に、両親に従う戒めと、それに伴う祝福の約束が記されています。その十戒に基づいての勧めです。両親に従うことは正しいことである。なぜなら、神様は両親にその子供の養育をお任せになったからです。子供が両親に従うのは、神様に従うことに繋がるのです。「これは主に喜ばれることである」(コロサイ人への手紙3章20節)ともあります。しかし「主にあって」とあるように、親子とも主のみこころが第一であることも記されています。両親は「子供をおこらせないで」「子供をいらだたせてはいけない」(コロサイ人への手紙3章21節)主の薫陶(香の香りを染み込ませ陶器を焼くことから、徳をもって人を感化すること)と教え、諭し、時には戒め、育てることが勧められています。

6月16日 今日の通読箇所 エペソ人への手紙 6：10～24

「クリスチャンの戦い」

12節でパウロが「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、天上にいる悪の霊に対する戦いである」と記したように、クリスチャンの戦う相手は人間ではなく、その背後の悪魔です。英語の聖書で「戦い」が「レスリングをする」となっているのは、この戦いが取っ組み合いの汗みどろ血みどろの格闘だからでしょう。ですから、この熾烈な戦いに対抗するために、神の武具を身に着け

なさいと命じたのです。そして具体的には、当時の兵士の装備を描写し「真理の帯びを腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、信仰のたてを手に取り、救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、即ち、神の言を取りなさい」と言ったのです。

6月17日 今日の通読箇所 列王紀上 1章1～27

ソロモンがダビデ王の後継者であることは、以前から神様によって示されていた。またダビデはもとより、王宮の霊的指導者ナタンや、その他多くの指導的な人々の承知し支持していたことであった。これに対し、ソロモンの兄であるアドニヤは、自分がソロモンをしのいで王位につこうと野心を越し、同じく野心の多い人たちの、支持を取り付け、手兵を養うなど次第に準備していたが、とうとうエンロゲルに結集して氣勢をあげた。「アドニア王即位」という既製事実を作り、もれを老年のダビデ王、年少のソロモンに押しつけ、いやおうなしに認めさせようとするのである。

6月18日 今日の通読箇所 列王紀上 1章32～53

ダビデ王、ナタンたちは、ソロモンが王の後継者であることを今まで、公式には布告してなかった。しかしこの状況の中で、今いそいでソロモン王即位の布告を行うことになった。その結果、神様の示し、ダビデ王の指名、ザドク、ナタン、ペナヤらの支持賛成が明白なので、全国民もこぞってソロモン王を承認歓迎することになったのである。ここにアドニヤ一味は離散し、アドニア自身はソロモンの前に平伏して、命乞いをするはめになった。ソロモン王即位という祝日であったから、今はソロモンが寛容を示し、一応アドニアを許したのは良いことだった。

6月19日 今日の通読箇所 列王紀上 2章1～12

勇王ダビデも静かに老い、今や「すべて父の行く道」すなわち死の道につかんとする。死は万人の逃れぬ運命である。それ故我々も常に「神に会うそなえ」を全うしていなければならない。ダビデはソロモンに与えた遺言の中で、信仰の勇気と、聖書に対する従順を教えている。それと共に、ヨアブ、パルジライ、シメイなど、問題の多い家来たちの所分を命じた。ダビデは寛容と忍耐の間に長く彼らを観察したが、その結果、彼らの本性は遂に変らぬものと見込んだからである。事実それは次第に明らかになって来る。

6月20日 今日の通読箇所 列王紀上 2章13～35

ダビデもソロモンも、寛容に人の罪を許し見逃したが、人によっては恵に慣れ、かえって王の裁きをあなどり、性こりもなく同じやり口をくりかえすケースがある。今は手も足も出ないアドニアがバテシバに願って、ダビデ王晩年の妾アビシャグを求めたのは、これによせて、他日自分こそ実はダビデ王の真の後継

者だったのだと、主張するための準備工作なのである。バテシバは気がつかないが、ソロモンの目はごまかせない。しかもポアドニアの背後には、例のコアブ、アビヤタルらの策謀、指導があることも察したから、かくてアドニア、ヨアブの処刑、アビヤタルらの追放ということになった。

6月21日 今日の通読箇所 列王紀上 2章36～46

シメイはアブサロムの乱の時に都落ちするダビデを呪った。乱が平定したのち「シメイなど殺してシメイ」という家来たちをなだめて、ダビデは彼を許した。ダビデが遺言の中でその処置を命じたのは、その後もよほどシメイの態度が悪かったからだろう。ソロモンはシメイに改めて警告を与え、謹慎を命じた。好意につけ上るのは小人の特徴で、3年後、彼は不用意に謹慎の命令を破り、処刑されることになった。神に対しても人に対しても、甘えつけ上るのは良くない。

6月22日 今日の通読箇所 列王紀上 3章1～15

若年にして王位についたソロモン王には、二つの思いがあったに違いない。一つは、神と民に対する重大な責任感の緊張と恐れであり、他の一つは、絶大な地位にともなう権力の自覚、また富貴、快楽、領土拡張、戦争などの野心である。しかしソロモンの場合、前者の真剣な責任感が強く、いま後者を考えるいとまがなかった。その彼へ祈りが神のみ心にかない、神は彼の祈りに答えて王様の知恵を約束さただけでなく、それ以外のものすべて賜物として与えられることも約束された。本当に「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」との言葉の通りである。

6月23日 今日の通読箇所 列王紀上 3章16～28

このソロモンの裁判の話は有名で、いろいろに形を変えて世界中の「名裁判官物語」に出て来る。ソロモンがここで本当の母親を見分けたのは、「細かい証拠調べや理屈よりも、本当の母親の持っている「愛」、を調べたのだ。子供にとっては、何よりも「愛」のある母親に育てられるのが一番幸福なので「実の親かどうか」という問題さえ、案外二の次ぎであるかも知れない。キリストが「親切なサマリヤ人」の語の中で「だれがこの人の真の隣人だったか」とおっしゃったのも、同じ意味だと思う。神様の人間に対する評価も、細かい成績調べでなく「愛」を標準になさるに違いない。

6月24日 今日の通読箇所 列王紀上 4章 1～21

6月25日 今日の通読箇所 列王紀上 4章22～34

列王紀上 4章

1 節から 6 節までは、ソロモン王宮廷の中央の高官たち、7 節以下は地方官である。国威大いにあがり、諸外国の朝貢品が続々と集って来る。国は富み、民は栄え、ソロモンの王宮も繁栄を通りこして、少しぜいたくになってきた様子も見える。26 節以下には軍備充実の様子も見えるが、何と云っても 29 節以下に記された、知恵と学問がソロモン王のご自慢で、その範囲は、哲学、文学、自然科学に及んだ。そして彼は諸外国の王たちにとっても国政と学識の指導者として仰がれていた。

6 月 26 日 今日通読箇所 列王紀上 5 章

さていよいよソロモンは、父王ダビデ以来の念願だった神殿建築に取りかかることになった。イスラエルには大きな木材が出ないので、北方の国ツロから買い入れることとし、木造建築の技術者もいないので、これもツロから招かねばならなかった。そのかわりイスラエルは豊富な食糧をツロに輸出した。この取引契約も、神の祝福とツロの王ヒラムの好意で順調に行われた。結局 20 万人近い技術者労働者がこの工事に協力して働いた。とにかく大変な事業だった。

6 月 27 日 今日通読箇所 列王紀上 6 章 1 ~ 22

6 月 28 日 今日通読箇所 列王紀上 6 章 23 ~ 38

6 月 29 日 今日通読箇所 列王紀上 7 章 1 ~ 22

6 月 30 日 今日通読箇所 列王紀上 7 章 23 ~ 51

列王紀上 6 章、7 章

ここはソロモン王の、神殿および宮殿建築の記事だが、記事は詳細にわたり、まるで文字で書いた設計図のようだ。昔テントを張って砂漠を移動していた先祖のころと違って、イスラエル人の生活も安定と繁栄の時代に入ったので、今、国力を傾けてりっぱな神殿を建てたのは、神に対する、ソロモン王と人々の、まごころと熱心のあらわれだった。我々も、自分たちの受けているそれぞれ恵みに従い、まごころと熱意をもって神に仕えたいものである。